

2022年12月28日
多摩支部企画事業委員会 土井隆夫

明治大学交響楽団 第99回定期演奏会 鑑賞報告

年も暮れの28日すみだトリフォニーホールで開催された明治大学交響楽団第99回定期演奏会に初めて行きました。明治大学交響楽団は、来年創部100周年です。私は、昔購入したクラシックのCDセットを時々聞いていますが（今回演奏される3曲も入っています）、交響楽団だけの演奏会を鑑賞するのは初めてかもしれません。歳を重ね待った機会がやっときた喜びです。

最初の曲目はスッペの喜歌劇「軽騎兵」序曲。
スッペ（1819-1895）はオーストリア出身の作曲家でオペレッタの父と呼ばれる存在。最初のファンファーレを知らない人はいないくらい有名で、広島東洋カープの応援歌としても使われています。幕開きにピッタリの曲です。

2曲目はボロディンの歌劇イーゴリ公より「韃靼人の踊り」。
ボロディン（1833-1887）はロシアの作曲家で、モンゴルの敵将が捕らえたロシアのイーゴリ公を懐柔しよう宴会を開き、そのとき踊られるのが「ダッタン人の踊り」。ソチ五輪の開会式冒頭で演奏、異国情緒あふれ、異民族同士が手を取り合う大切さ、人々を結ぶメロディーでした。

最後の曲はマーラーの交響曲第1番「巨人」。
グスタフ・マーラー（1860-1911）はオーストリア出身の作曲家、1888年28歳の時の最初の交響曲。20代から指揮者としてスタートし作曲活動にも取り組む。彼自身の人生を音楽に変えたのかもしれませんが。巨人という副題がついていますが、青春からの順風、苦悩、嵐を経て凱旋するような楽章の流れになっていて、弦楽器の静けさ、金管楽器の力強い響き、大きな管楽器の重々しい哀愁、そして全ての楽器による力強い高らかな壮大なフィナーレを迎えました。いま世界は重苦しい雰囲気漂っているけれど、きっと明るい幕開きが訪れることを感じさせるような演奏作品でした。

客席1,800名の会場、正面には荘厳なパイプオルガンのあるホール、約100名の団員による本当に素晴らしい演奏でした。最後の曲の終了時には指揮者の和田一樹さんが各パートを回ってそれぞれ紹介、拍手が止みませんでした。感動しました。

演奏会に行くと思いますが、音楽との出会いも一期一会。音は一瞬で消えるかもしれませんが、そのとき感じた思いは残ります。今年はいろいろあった気持ちのなか、心温まる素敵なプレゼントをいただきました。



荘厳なパイプオルガンが正面にある「すみだトリフォニーホール」 ホール入口前から見えるスカイツリー